「親のメッセージ」
1999年11月号に掲載

その1

子どもの写真展・作品展を開きました

大塚典子（大分県大分市）

今年９月15日に大分市の中心部で、こどもたちの写真展・作品展を自主上映会の会場で同時開催しました。こどもたちというのは、わが家のふたりの息子たちのことです。

小学校の教師たちによって、生きる希望を失い、自分の存在する価値さえ見出せなくなってしまった息子に、なんとかして自信と生きる希望を取り戻して欲しい。そう、心の底から願い続けてきていました。やるせない想いをおもちゃのエアガンに込めていた息子の気持ちに、心では涙しながらも、「いつかきっとこの子の晴れやかな笑顔を取り戻してみせる。そして、親子して命を絶つ寸前まで追いつめた教師たちから受けた屈辱を晴らし、必ず汚名挽回してみせる…」と、固く心に誓っていました。

人間不信をうえつけ、不登校を病気扱いする教師や保護者たちに、どの子も同じ可能性を秘めた大切な存在であることを認識させたうえで、お互いに反目しあうだけでなく、戦後の国交回復のように、未来に向かってこどもたちと共に歩き出したかったのです。

弟の方は、去年の12月のホームシューレの作品展サロンや、今年３月には、日本ホビー協会から「ホビー大賞」を受賞し、自分のアート作品を通して自信をつけていたので、兄の方にも、なんとか認められる発表の場を探していました。

その「場」がなければ、こちらで作ってしまおう…と、個展を開く時のための会場を探し始めていたのでした。

そんな時に、この、ホームシューレのおかげで知り合えていた方から、映画の自主上映会の主催者を探しているという話を聞き、その話を受けて、その上映会の会場で写真展・作品展を同時開催できることになったのです。

心暖かな人たちと一緒に、短期決戦のような あわただしい準備の日々でしたが、その中に、感動で胸が熱くなり、涙がとまらないほどの、嬉しい想いを何度も何度もさせていただきました。そんな想いが爆発するかのように、私の心に嬉しい歌がいくつも生まれました。

こどもたちにもそんな想いが伝わったのか、快く協力や応援をしてくれるようになりました。

当時の教師たちにも、映画のチケットの分担や、当日の会場の準備をほかの人たちと一緒に頼みました。

前日に、地元紙に写真入りで大きく「不登校で自信をなくさないで」という見出

しで協力的に紹介されたこともあり、大反響でした。(あとで息子が「不登校で自信をなくすんじゃなくて、登校で自信をなくすんだよ」って言うようになりました)

心配していた天気も、前日のどしゃ降りが嘘のように晴れ上がり、今までに流してきた涙と、これからを象徴するかのような、嬉しい記念の1日となりました。

12歳の伸洋は、自然をいとおしむような写真を30点。
10歳の輝夫は、カラーワイヤーのアート作品を、以前から作っていたアルミホイル製の作品も含めて約100点。みんなの協力で広い会場に展示させてもらいました。

会場に私の想いをさりげなく記させても頂きました。

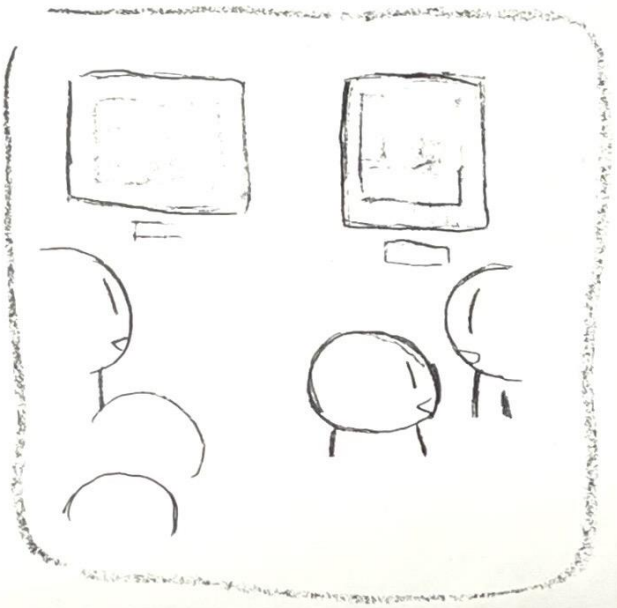
雨の日も　心に雨の　ふる時も
　　君が心に　夕陽うつさむ

いつの日か　心に虹の　かかる時
　　伸びて輝け　世界の庭で

縁ありて　この世で君らの　母となり
　　比類なきこの　幸せつかまん

こどもたちも、公然と認められて、来場者の感嘆の声を聞き、いくつもの花束を受け取って、照れと喜びに満ち溢れた輝く笑顔がこぼれました。

最後の片づけまで、心暖かな人たちと共に黙々と手伝ってくれた教師たち。しばらくして、過去のこだわりが私の心から、ふっと消えていくのを感じました。

息子から、「お母さん、僕を不登校にさせてくれてありがとう」と、言われましたが、私の方こそ、こどもが不登校という道を選んでくれたおかげで、かけがえのない体験をたくさんさせてもらっています。

これからも、親子で楽しく生きていきます。希望の未来を信じて…。